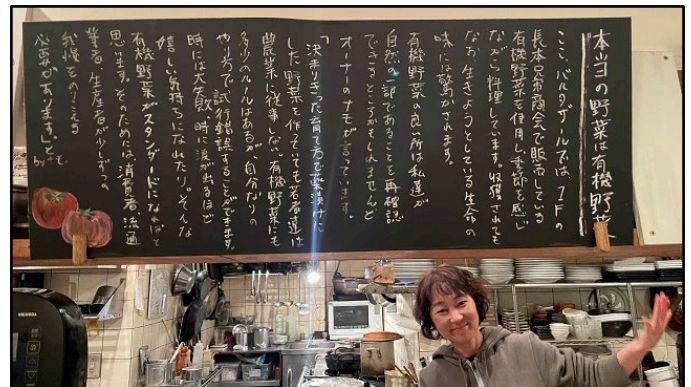




平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 4月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

京都から新幹線に乗り東京に向かう時、この辺に
来ると不思議と目が覚める。富士宮市辺りが一番綺
麗に抜けるのだが、今回はいつもより少し東、沼津近
くまで来てから写真を撮り始めたかも知れない。新幹
線ならこの辺からの富士が好きで、東名高速なら逆に
東京から箱根の北側、御殿場辺りに差し掛かるところ
から、初めて見える富士が心躍らせる。

19歳の頃、普通電車を乗り継いで東京に行った事
があり、その時が初めて富士山を見た時だった。すっか
り興奮し、座ってられなく、車両の中をあっちへ行ったり、
また戻ったり、感動したというより血が騒いで仕方な
かった。結局30分くらいはそうしていた。ようやく言葉に
なって出て来たのは『風呂屋で見た富士山とおんな
じだ』。絵に書いたような富士山とはあの事だった。



で、何処に行ったかという、長本兄弟商会に行っ
て来た。先々月にナモが亡くなったと書いたが、自分に
とっては仕事の出発点だから、思い入れは人からは理
解できないほどある。画像はナモが途中から引き継い
でやっていた、バルタザールというレストラン。もちろん考
え方は1階の八百屋と同じ。画像が小さすぎて、文字
が読めないだろうから少し書いておくと、ナモの言葉を
娘の『はなちゃん』が書いたのだろう。『収穫されても
なお、生命の味には驚かされます』『有機野菜の良い
所は私たちが自然の一部であることを再確認できると
ころかも知れません』『有機野菜がスタンダードになれ
ばと思います。その為には、消費者、流通業者、生産
者が少しずつの我慢をのりこえる必要があります』と。

行った時は木曜日で定休日だったが、丁度昼時だった。ランチを作ってごちそうしてくれた。旬の鱈を小麦粉と片栗粉を混ぜたものだろうか、自分には如何して作れば良いのか分からないが、あの揚げ出し豆腐のように、衣をつけて油で軽く揚げ、少し出汁で煮てあったのかな。それを自前のタルタルソースで食べる逸品だった。付け合わせも法連草の御浸しや、ポリュウムたっぷりだった。『玄米と白米がありますが、どちらにしますか』と聞かれた。今更玄米でもないの、白米で頼むとお願いした。さほどお腹は空いていなかったから、話しをしながら時間を掛けて完食した。何を食べても最後まで、食べ始めと味が変わらず、普通に美味しかった。

別に味わい深く食べていた訳ではないが、すべて素材の味が上手く引き出されていて、だからって味がうすい訳ではなく、食べていて落ち着ける味で、身体に馴染みやすく、食事をしている実感がわく料理だった。

仕事の話をしに行っているの、聞いてみると、1500円ということだった。この冬に行くようになった高槻のうどん屋、いつ行っても満席だが、そこでは鍋焼きうどんしか食べない。1380円。この鍋焼きうどんは高い印象を持っている。杉並区 JR 西荻窪駅を降りて、歩いて5分足らずのこの場所で、あれだけ手の込んだ料理を食べて1500円なら、私は通う。だけど、店の存在を知っていれば、が条件になる。

1階の八百屋もそうだが、創業から凡そ50年近くになる。当時は考えている事が突出していたから、突出しているという事は希少性があり、希少性があるという事は他に無いという事で、このビルにその手の人が集まって来ていて、真面目にやっていたら店は繁盛する事が出来た。少し考えると、今でも希少性はある。その希少性が内に潜んでしまっている事が、問題な気がする。当時は髪を伸ばして、髭をたくわえている風情に、考えは充分に外に出ていたし、話すことは充分に独特な哲学や思想、つまり価値が現れていた。

今は、何でもかんでもが多様性の中に個性が埋没してしまう時代になっている。正しさが分かりにくく、ここを如何に突破するかが持続へのカギになるのだろう。

さて、4月は母の誕生日を迎えるので、いつも母のことを書いて来た。昨年の7月頃、兄から連絡があり、『物を食べられなくなっているから、一度戻って来た方が良い』との内容だった。戻ってみると、身体は随分弱っているが、意識はしっかりしていた。日常的ではない次男坊の存在は、そう言えばそんなのがいたような、要は記憶がおぼろげになり、呼び覚ます手間が面倒になっている様子だった。『自ら、ものが食べられないという事は、延命になる』と言われたとの兄の言葉が印象的だった。丁度、酷暑の入り口で、その季節が過ぎれば身体も落ち着きを取り戻すだろうとの思いを兄に告げた。それで、10月頃連絡してみると、やはり口まで運ぶと自分で咀嚼できる回復をしているとの事だった。

今年に入り、2月の末頃だったろうか、再び兄からの連絡で、世話になっている医師から近い人には声を掛けておいた方が、と言われたと連絡があつた。行ってみると、確かに生命の維持にのみ、必要な食事量になっていた。声を掛けると内面で意識は動いている様子が見て取れるが、外には出て来るエネルギーが無い。父の時はもっと、しっかりしていた。父は自ら生命を閉じる意志を感じるほどしっかりしていて、その翌日に息を引き取った。なので、今回はこの先が分からなかった。もう少しで98歳の誕生日を迎えるので、そこまで生きてほしいと、その事を願う日が続いていた。

水曜日に社内のLANの配線をすべて更新し、木曜日に前述のナモ商会に出掛け、金曜日の朝は食事も喉を通らなかつた。3日で体調を戻すと決めていた日曜日、場所は高槻だがいつも通りに過ごしていると、携帯電話が未だベッド脇に置いていたのに気づき、取りに行かなきゃと思っていると、電話が掛かって来ていた。『いよいよだ』と言う。そして、夜遅く、日付が変わろうという時、『駄目だった』と連絡が来た。

月曜の朝、悟りを開いた夢で目が覚めた。記憶にないが初めてではない。起きても、人間は不必要な事を、随分多く考えているものだと、未だ続いていた。